

# 小児科学における臨床心理学的研究

逸 見 武 光（東京大学医学部）

私どもは小児科学における臨床心理学的研究において、下記の2つの課題に注目している。

1. 乳児虐待の様相と被虐待児の成りゆき
2. 障害児ないし非行児に対する親の心理的態度に関する国際比較

これら2つの課題は必ずしも無関係なものではない。被虐待児はしばしば障害児ないし、親、特に母親が障害児と信じている例であり、他方、犯罪者ないし非行少年の中核には被虐待児、特に乳幼児期における障害児がみられる。従って、これら2つの課題を平行して探求することにより、人格発達、殊に精神病質者と呼ばれる人たちの発達心理学的側面を知ることができよう。このような考え方に立つことによって、いわゆる精神病質者と呼ばれる人たちの予防の1側面を提示することができると思われる。

## 第1年度研究計画

1. 乳児虐待の症例研究
2. いわゆる冷情人格者の乳幼児期に関する症例研究
3. 障害児の母親の不安感に関する調査
4. 非行少女の母子関係に関する調査

以上の4つの課題を立て、第2年度以降の研究に対する予定ないし準備を行なう。

## 第2年度研究計画

第1年度に立てた計画のうち、可能な課題の実施を進める。

## 第3年度研究計画

第1、第2年度においてそれぞれに得られた資料ならびに研究結果と考察を包括して、母子相互関係の人格発達への影響、発達心理学的歪みの予防等について私どもの見解をまとめる。

注.

私どもは、我国が他国に比べて犯罪・非行が少なく、安全な社会を維持している、という外国の人々の見解は間違っていないと考えている。その基盤には母子相互作用を支持する社会・心理的姿勢やネットがゆらいでない、と仮説してさしつかえない機能があるのだろう。

上述の仮説から、我国において発達心理学的歪みを来す危険人口を探り、その予防を考えたい、と期待している。